

皆様、こんにちは。

府中教会、アンドレアです。

イエスを知りたいと望む人は、イエスの栄光が表れている十字架の中に目を向けなければなりません。今日の福音は、十字架に目を向けるようわたしたちを招いています。十字架は、しばしば扱われる装飾品やアクセサリなどではなく、じっくり考えて理解すべき信仰の象徴です。十字架につけられたイエスの姿には、愛の至高のわざであり、あらゆる時代の人々のいのちと救いの源である、御子の死の神秘が表れています。イエスは、自らの死と復活の意味を説明するために、たとえを用いて語ります。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(24節)。このようにイエスは、地に落ちて新しいいのちを生み出す、一粒の麦にご自身をたとえています。イエスは人となられて地上に来られましたが、それだけではありません。罪の隷属から人間をあがない、愛のうちに新しいいのちを与えるために、死をも受け入れなければなりません。

イエスの弟子であるわたしたちも、イエスが成し遂げたこの麦の粒のわざを行わなければなりません。そして、新たにされた永遠のいのちを受けるために、いのちを失うという過越のおきてに従わなければなりません。いのちを失うとは、一粒の麦となるとは、何を意味するのでしょうか。それは、自分のことや自らの利益をほとんど考えずに、隣人、とりわけもっとも小さくされた人々の要望に「目を向け」、それらに応ずることです。からだや心に傷を負った人々に愛のわざを進んで行うことは、福音を生きるもっとも真正な方法です。それはわたしたち共同体が互いに愛し、受け入れ合いながら成長するために欠かせない基盤です。

